

(2. 特集 行く・読む・感じる)

2-4. 北西インド・タール砂漠地域における女性と「泣くこと」

中野 歩美

私は、2013年の夏から約2年間、北西インドのタール砂漠地域に暮らすジョーギー（Jogi）という、かつて移動生活を送っていた人びとの現在を追ってフィールドワークをおこなってきた。2015年に帰国してから時間が経つにつれ、よくもあんなに厳しい環境のなかで平然と暮らしてきたものだ、としみじみと思うようになり、同時に、そんな風に感じてしまうほどフィールドから遠のいてしまったのかと少しさみしくなる。

はじめて本格的に調査に入った際は、現地の大学の先生の勧めもあり、市街地の安宿を拠点に、そこからほど近いジョーギーたちの居住地であるCコロニーに通っていた。しかし現地の大学に通うジョーギーのN氏との出会いもあって、その後、彼の両親と4人の兄たち計5世帯が暮らす、市街地から15キロほど離れたD村の小さな集落に拠点を移すこととなった。

街のCコロニーには100世帯以上のジョーギーが暮らしており、お世話になった家族以外からは「白人」（gori）と呼ばれることも多かった。それに対しN氏の家族は、皆私を三女として歓迎し、本当の家族の一員のように扱ってくれた。そのおかげで、私は一度も不安を抱くことなく、本当に自分の家族と過ごしているような安心感に包まれて日々を送ることができた。彼らとのたわいもない会話や「日常」の経験を共有していくうちに、新しい発見をしたり、単語の意味や用法を覚えたり、まるで幼い子どもが成長していくように、生活に根ざしたさまざまな知識を少しずつ吸収していった。

こうして数か月後には、私は家で子どもたちの面倒を見ながら留守番をしていられるほど、D村でのN氏一家との生活に溶け込んでいたが、その時分においてもまだ慣れることのできないことがひとつだけあった。それは、女性たちの「泣く」という行為であった。というのも、私の泣き方と彼女たちの泣き方は、同じ「泣く」という行為であっても、明らかにその内容が異なっていたからだ。

たとえば、N氏の2人の姉が久しぶりにD村に帰省してきたときのことである。2人は40代と30代の女性で、日々の膨大な家事や子育てから解放される実家での貴重な時間を、老いた母親の家事手伝いに費やして数日間を過ごし、別々のバスでそれぞれの婚家に戻る日を迎えた。午前10時半を回り長女のバスの時間が近づいてくると、突然2人の姉妹とN氏の母親は家の前で円陣を組むようにして肩を組み、3人同時に大声で泣き喚きはじめた。あまりの唐突さと音量の大きさに、私は彼女たちが泣いているのか怒っているのか、はたまた何かの儀礼を始めたのかと混乱し、泣いていると分かった後はその場にいることすら憚られてしまい、家の中からこっそりと外の様子を眺めていた。大の大人が大声で「オーーーーーン、オーーーーーン」と繰り返すこの泣き方は、日本人が当たり前と思っているような、こらえきれずに涙があ



写真1 ジョーギーの婚姻の様子（筆者撮影）

ベールに包まれた花嫁の少女は儀礼のあいだ絶えず泣き続けており、世話係である少女の兄嫁が体を支えている

ふれるとか、むせび泣くとかいった泣き方とは全く異なっていた。フィールドワーク中、そうした場面に出会うたびに、私はどのような立ち振る舞いをするのが正解なのかわからずに、ただただじろいでしまうのだった。

女性の泣くという行為をもっともよく目にするのは、婚姻儀礼と葬儀の場においてである。前者の場合、新婦は一連の婚姻儀礼がおこなわれるあいだ、ずっと「オー——ン、オー——ン」と高音で泣き続ける。これは、その日を境に、それまで暮らしていた生家を離れ別の家に嫁ぐことへの悲しみを表現するものだといえる。とはいえ、その場全体に悲壮感が漂っているわけではなく、むしろ泣き続ける少女とその世話役である数人の女性以外の親族や参列客は、賑やかに談笑したり歌を歌ったりしており、両者の対比的な様子はかなりシュールである（写真1）。

後者の葬儀の場合には、およそ2週間ほど弔問客が途切れることなく訪れる。その際女性たちは、必ず辺り一帯に響き渡るほどの大声で泣きながら弔問先の家にやってくる。これは言うまでもなく、故人とその親族に対して、彼／彼女を失った悲しみを表現するものである。若い女性は、上述したように高音で「オー——ン、オー——ン」と泣きじゃくり、年配の女性は同じように低い地声で泣きながら弔問先へ向かう。また葬儀の場合には、「なぜいなくなったのか」といった嘆きの節を繰り返すという独特の泣き方も見られる。初めてこのように泣きながら弔問先に向かう女性の集団を目にしたとき、私は思わず「泣いているの？それとも歌っているの？」という質問をしてしまい、周囲の人たちを大笑いさせてその場の空気を台無しにしてしまった。

ところで、こうした女性たちの特徴的な泣き方による「泣く」という行為に対してしばしば

耳にするのが、「あれは嘘泣きだ」という男性たちの語りである。事実、私自身も数人のジョーギーの男性から「女の人みんな泣きまねをしているのさ」とか、「涙は唾をチョッチョッとつけてるんだよ」という話を聞いたことがある。それが本当だとすると、この地域の女性たちの「泣くこと」は、もはや個人の感情に由来するものではなく、地域的な慣習であり社会的な意味合いの強い実践として解釈されることになるだろう。「泣くこと」自体が、個人というよりも、彼らの帰属する社会のいくつかの文脈における「あるべき姿」であり、そうすることが慣習的規範として求められているともいうことになるのだろうか。

しかしながら、少なくとも私がフィールドワーク中に遭遇した女性たちの泣くという行為を思い返してみると、それを社会的な慣習とする機能主義的な解釈ではすんなり納得できないというのが本音だ。これまで目にしたどの女性の泣く姿にも、私は心を揺さぶられ、あるいは胸を締め付けられるような思いにさせられてきたからだ。

おそらくそうした解釈が腑に落ちない大きな理由は、そのような観点から女性たちの「泣くこと」を捉えようとした場合、実際にその場面で慟哭する女性の主体性が背後に追いやられてしまうことにある。そこで、タール砂漠地域における女性たちの「泣くこと」についてのもう一步踏み込んだ理解を目指すための手掛かりとして、以下の2点をあげたい。第一の手掛かりは、「泣くこと」は——たとえ本当に泣いていようと嘘泣きであろうと——個人的な感情や情動にもとづいて生じる行為であるという認識が共有されている点である。第二の手掛かりとは、「泣くこと」の行為者とその受け手の関係性への着目である。

これらを踏まえれば、女性たちの泣くという行為は、この地域の社会的な慣習的行為として括られずに、ひとつひとつの〈今—ここ〉で起きた事象として捉えなおすことができるだろう。つまり、ジョーギーの女性が大きな声をあげて「泣くこと」は、少なくとも彼女の身近な親族の人びとにとっては、疑いようもなく彼女個人の抑えきれない感情によって生じた行為である。そしてそれは共感を呼び起こすような、他者に開かれたものである。よって、「泣く」という個人的な行為は、その行為者（共感者）が共有する紐帯——ジョーギーの場合、多くは親族的な紐帯——を再確認させる社会的な一連の文脈において理解することが可能となる。

こうした行為と文脈の全体性を捉えることこそ、人類学的なフィールドワークの醍醐味であり、彼らと私たちの地続きの対話の地平を開くことなのではないだろうか。